面のリストが報告されている."

つまり第5条の規定で，これまでローマ字大文字づきであらわされていた火口のうち，顕著なものには固有名がつけられることになったので，その命名に利用されるような名は，あらかじめリストを作っておこうというわけである．その表のはじめから数個を紹介すると，バック，エルマー，フオックス，ヘルマート……というような名が並んでいる．恐らく作家とか画家，音楽家と言う人物なのだろう．

以上が決議文の全文であるが，多少補捉的説明をすると，Region No. 1 と 144 とは，それぞれ北極および南極の円形の領域であって，これを 16 の Province に分割する仕方は，次の総会までに研究するとのことである．

この決議案を見ると，いかにも NASA の LTO の方式の押しつけ，という感がなくもない．ことに，ソビエトの研究者からは相当強い反対が出そうに感じられるが，この総会では第17委員会（月）にはソビエトからの出席者は一人もなく，最後の採決では第17委員会の中での反対はなかった．

LTO は完成すれば，1：250,000 の地図だけで総計 2304 枚，重量はネットで 75 kg に達し，制作に要する作業量は44人・年となる．方法はルナー・オービターからの写真測量であるが，この総会の時点では，赤道近い小部分しか撮影が終っていなかった．完成までに数年かかる見込みである．

なお，第2項の決議文中に，"詳細な参考文献は後記"という文章があるが，総会の席上ではこの文献表は配布されなかった．

新刊紹介

星三百六十五夜

野尻抱影著

（恒星社厚生閣，B 6 判，384頁，1500円）

これは抱影先生の数多い星の随筆集の中でも異色の作品である．1年365日に次々と星空の推移があるが，それと同時に人間の地上の生活の変化がある．昔の日本人はこの季節の推移の微妙な変化までを「季感」としてとらえ，短詩形である俳句に「宇宙の現象」をよみこむには季感を示す「季語」に最大の重要性をおいた．

抱影先生が，この本の形を横長の「俳句歳時記」風に選んだのもそのような微妙な感覚の表現に最適な形式と感じられたからであろう．

1月1日は元朝の明星で，鬼貫の「春立つや，星の中から松の色」の句がちりばめられる．そして或る日，ある時に眺めた星の印象が，あるいは淡々と，あるいは熱っぽく語られる中に，中国，ギリシャ，ローマ，あるいはヨーロッパの詩人たちの「星の讃歌」がちりばめられる．あるときは戦前の銀座の空の歌舞伎座の大屋根の上に輝くシリウスがあり，そのシリウスが頁を繰ると桜並木の夜桜の彼方にかたむき，そして北斗が登場する．

夏の糸魚川の砂浜，よしず囲いの小屋の旅芝居，そのよしずの外の青黒い海と青白く光る夜光虫，その上に輝く天の川，それが何十年も前の風景でありながら，つい昨日の出来事のようにあざやかに描写される．若い頃すごされた甲府の中学の宿直の夜の校庭で，星と共にレンズにとられた南アルプスの山嶺も美しい．修学旅行の前夜「靴下の破れをつづって」深夜に見渡した星空に新星を発見した女学生の「靴下星」というほほえましいエピソードもあり，またさまざまな「日本の星名」の考証もある．ある頁からは「今しも双子座に近くオリオンの昇るを見よ．……」とローマの詩人マニリウスと近づきになれるし，また「天もし酒を愛せざれば，酒星天にあらじ．地もし酒を愛せざれば，地まさに酒泉なからむ．」と唐の詩人李白と共に春の夜の海蛇座の「酒星」を指さすことができる．あるいは建礼門院右京大夫と共に「あさぎ色なる(空)に光ことごとしき星の大きなるがむらもなく出でたる，なのめならずおもしろく……」と江州坂本の初冬の星空に感激する．

このような星空への興味と愛情は行往坐臥の生活のはしばしにもあらわれており，抱影先生自身も 12 月 19 日の項に「自分のことをいえば，少年の頃ふと星に親しんでから六十余年はいつの間にか過ぎてしまったが，人生行路の険しい山坂を登りつ降りつする道伴れに，いつも星がいないことはなかった．夜はもとより，眼を閉じれば昼もである．そしてこちらに求める心さえあれば，星ほど雄弁なものはない．大自然に共通な言葉——光と瞬きとで，いつも話しかけてくれる」と述懐しておられる．

365 頁をそれぞれちがった星の話題で埋めるのは決して容易な業ではないが，それを可能にしたのは抱影先生の深遠該博な学殖と，そしてはげしい星への愛情・詩魂であると思う．多くの人によんでもらいたいという気持の反面，ひそかに筐底にかくしおいて，香り高いブランデーのように一頁また一頁と愉しみひろげるべき本であると思う．ましてや，書評のために読みいそぐ類の本では絶対にない．1955年に野間仁根画伯の星座絵で装られた豪華本は貧書生の手の届く値段ではなく，数軒の本屋で立読みして読了したが，今回手頃な価格の愛蔵版が刊行されたのはまことに慶賀に耐えない．ますますの御健筆を祈る次第である．

（石田五郎）